
ウンムシ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウナムシ

【Nコード】

N6012D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

琉球に流された源為朝。遠島になっても意気盛んな彼は島の者達を助ける為に海の怪物退治に出て。沖縄の妖怪の話と為朝の伝説を混ぜたお話です。

第一章

ウナムシ

名だたる武の男であつた。その為に疎まれその為に愛されその為に命を助けられた。そういう男であつた。

「あの者はもうよいではござらんか」

「殺すには惜しい者ですぞ」

保元の乱の後の戦後処理において。源為朝を助命する声は多かつた。これは元々平安貴族達が死の穢れというものを嫌つたせいであるがそれと共に彼の武芸を惜しんだからである。

それを聞いても藤原信西は考えを変えようとしなかつた。彼は彼で政治家であり政敵を放つておくつもりはなかつたのである。その際容赦なく斬つてしまえるところが彼が普通の貴族達とは違つところであつた。

だがこの乱における立役者の平清盛の言葉でこれが変わった。彼は平家物語では極悪人であるがその実は実に温厚で心優しい人物であつたのだつた。

「源氏の血はもう充分流れております」

そう信西に述べるのであつた。

「それではそれ以上は」

「しかしだ」

信西はその清盛に言われても考えをまずは据え置いて彼に問うのであつた。

「あれだけの武芸をこのまま放つてはおけぬ。どうするといふのだ」

「では流刑にすればいいでしょう」

清盛はこつ提案するのであつた。

「流刑か」

「しかも気の遠くなる程遠くへ」

そこへやって彼を助けようといふ考えであつた。この男はどうい

うわけか甘さがあり源頼朝にしるその弟の源義経にしる助けている。義理の母が彼を叱ったからだというがそもそもその程度で敵を助命するというのは非常に稀な話である。それは結局は彼等を殺すには彼があまりにも甘いということに他ならない。

「そこへやればよいでしょう」

「ふむ。遠くへか」

それを聞いて信西の気が変わった。

「それではじゃ。それこそまことに気の遠くなる場所へ流そうぞ」

「それで宜しかろうと存じます」

清盛としてもそうでなければ信西がうんと言いはしないのはわかっていた。だからそれは頷くのであった。

「では瑠求に流すでしょう」

「瑠求ですか」

今で言う沖繩だ。当時ではそもそも日本かどうかすらわからない島々であった。信西はここでならよいとしたのであった。

「他はならん。それでよいか」

「はい」

為朝の命が助かるのならそれでよかった。それ以上の譲歩は無理であると清盛もわかっていた。

「それではそのように」

「うむ。それではじゃ」

こうして為朝の処罰は決まった。彼は南の島に流罪となったのであった。彼は胸を張ってその言葉を受け意気揚々と流刑地に向かった。それはまるで戦場に赴くようであった。

そのうちの島の一つに落ち着いた彼は。そこでも武芸を忘れてはいなかった。時間があれば刀を振り馬を操っていた。とりわけ弓に精進しそれで獣も鳥も魚も全てを捕らえる程であった。

「いや、これは」

「物凄い方が来られたものよ」

島の者達はそんな為朝を見て驚くばかりであった。何時しか彼は

ここでもその武芸を謳われるようになっていた。

「若しかするとこの方ならば」

「果たしてくれるやも」

そのうえでこう囁き合うのであった。そうして為朝のところに集まって訴えるのであった。

「化け物をか」

巨大な身体に筋骨隆々の肉体をしている。精悍で雄々しい顔の眉は見事なまでに吊り上がっている。二の腕はあくまで太く長い。その身体を武士の服で覆っている。それが源為朝であった。島の者達はその彼に対して訴えていたのである。

「はい。実はこの島には得体の知れぬ化け物がおりまして」

「皆困っているのです」

「そうであつたか」

ここに来て間も無くだったのでそれは知らなかった。為朝は今それを始めて知つたのであった。

「化け物がか。してその化け物の名は何というか」

「ウナムシといます」

島の者の一人がこう答えた。

「ウナムシか」

「はい、普段は海におりまして」

彼等は為朝に対して語りはじめた。

「わし等が漁に出ますと海から出て船を沈めてしまいます」

「そうして船に乗っている者を喰らうてしまうのです」

「性質の悪い化け物じゃな」

為朝はそれを聞いて顔を顰めさせる。剛毅で一直線な性格の彼としてはそれを聞いて許せる筈がなかった。もうそのウナムシという化け物を退治することを決めていた。

「しかも何とか逃げて追いつけても追い掛けてきて島まで来て襲ってきます」

「それでも漁には出られないのです」

「そういうことであつたか」

為朝は腕を組んだまたその話を聞いていた。だが最後まで聞き終えるところで言うのであった。

「よし、そのウナムシとやらはわしが倒そう」

「まことですか」

「そなた等が困っているのをそのまま見ては置けぬ」

これは彼の俠気と正義感故の言葉であった。

「この弓と刀で何であろうが倒して見せようぞ」

「有り難い」

「それでは御願いたします」

「うむ。それではだ」

ここまで話したうえで島の者達に対して問う。

「そのウナムシは何処にいるのか」

「ウナムシですか」

「左様、そ奴がいるところまで案内してくれ」

こう言うのであった。

「さすれば退治しよう。頼むぞ」

「わかりました、それでは」

「我々が案内致しますよう」

こうして彼は島の者達が操る船に乗って海に出た。海は静かで空は晴れ荒れる気配は微塵もない。為朝はその静かな海を眺めながら船の先頭に立っていた。動き易いように鎧兜は身に着けず刀と弓を持ってただけであった。

彼は前を見据えたままであった。そうして島の者達に対して言うのだった。

「綺麗な海だな」

「はい」

「全くです」

島の者達も彼の言葉に応える。

「ですがこの海も」

「ウナムシが出るところになると」

「変わるのだな」

「はい、それはそろそろです」

彼等はこう為朝に言ってきた。船を漕ぎながら。

「この辺りに出ます」

「近付いて来ると」

その言葉が言い終わるか終わらないかのうちに。それまで晴れ渡っていた青い空が瞬く間に消えて黒く重い空になった。海も青から黒に色を変え波も荒くなった。明らかに異変が近付いていた。

「言っている側からか」

「来ました、これが」

「ウナムシが来た証拠なのだな」

「はい、為朝様」

彼等は怯えながら為朝に告げる。

「その通りです」

「御気をつけよ」

「来たか、いよいよ」

だが彼は恐れてはいなかった。むしろその逆でいきり立ち弓を構えた。そうして船の頭に仁王立ちしてそのウナムシを待ち構えるのであった。

第二章

「来い、化け物よ」

彼は高らかに言う。

「かつて保元での戦で思う存分暴れたこの為朝の弓今こそ見せようぞ」

その言葉に応えてか海の上に奇怪な化け物が姿を現わした。今為朝が乗っている船よりもまだ大きな身体を持っていてそれは蜘蛛に似ている。八本の足に八本の尻尾が見える。その頭は怒りきった牛のそれであり奇怪なことに八本の角がある。そうした異形の化け物であった。

「外見は迫力があるな」

為朝はウナムシの顔を見て不敵に笑ってみせた。

「しかしそれだけではわしは倒せぬ。参るぞ」

そう言うのと弓を放った。ひょうと放たれた弓は一直線にウナムシに向かう。そうしてその腕の一本を貫いたのであった。

弓が腕を貫くとウナムシはこの世のものとは思えぬ叫び声をあげた。島の者達はそれを聞いてさらに怯える。

「何という恐ろしい声だ」

「こんな声を聞いたのははじめてだ」

「わしとてはじめてよ」

弓を放ち終えた為朝はそう彼等に告げる。しかし彼は臆することなくもう一本放ちもう一本腕を貫くのであった。

「しかしそれでも恐ろしいことはない」

また聞こえる叫び声をよそに言う。

「化け物の相手もしたいと思うておった。ならばこそ」

二度も撃たれウナムシは怒り狂った。そうしてその目を真っ赤にさせて為朝に襲い掛かって来たのであった。

それに対して為朝は刀を抜いた。そのまま船の先で闘う。

ウナムシが腕と牙で為朝を襲い船から引き摺り落とそうとする。しかし彼はそれに対してウナムシに勝るとも劣らない強力を見せその腕を引き離す。それから迫る牙を刀で受けてみせた。

「面白い、面白いぞ」

彼は牙を刀で受けながら笑っていた。すぐ目の前に彼を一飲みにしまいそうな口があつても恐れてはいない。それどころか笑っていたのであつた。

「これだけの相手ならばわしとて退治のしがいがあるわ」

「ですがこのままでは」

「大丈夫ですか？」

「安心せよ」

後ろで小さくなっている島の者達に対して言う。

「わしは勝つ、何があるうともな」

「何があるうともですか」

「左様、この鎮西八郎為朝」

彼の異称である。幼き日にあまりの乱暴者ぶりから父に勘当されたが辿り着いた九州を平定したという話からこの異称がついたのである。

「この程度の化け物にやられはせぬ。見よ」

そこまで言うとならまで受けるだけであつた刀を翻させた。そうしてウナムシの額を叩き斬つた。

「そうしてっ」

今度はその刀を横に一閃させる。それで牙も切つたのであつた。

これで勝負は決まつたも同然だつた。為朝は止めにさらに切るうとする。だがウナムシはそれより先に海の中に入って逃れるのであつた。

「逃げたか」

「どうやら」

「そのようです」

島の者達がそれに応える。海にはウナムシのものと思われるドス

黒い血が流れ漂っていたがそれだけであつた。他にはもう何も残つてはいなかつた。

「これで終わりでしょうか」

「さてな」

為朝は彼等の問いに懐疑的な顔であつた。まだ刀を手に持ち海を見下ろしている。海にはまだウナムシの血が漂っている。

「死んでいればよいが。そうでないと」

「来ますか」

「ならばまた相手をしてやる」

為朝は平然としてこう述べた。

「それだけだ。安心せよ」

「そうであればよいのですが」

「何分ウナムシは」

「他の者ならいざ知らずわしは大丈夫じゃ」

彼の自信は変わらない。先程の闘いの勝利もそれに大きく関係していた。

「安心せよ。よいな」

「はあ」

「そこまで仰るのなら」

「では一旦島まで帰ろうぞ」

島の者達に帰るよつに告げる。

「まずは勝利じゃ。それでよいな」

「はい」

「それでは」

一先闘いは為朝の勝ちであつた。彼は船を島に戻させる。しかしウナムシの血はその船についていた。それは赤黒い一条の糸となつてつながれていた。まるでそれを辿って追つよつに。

第三章

島に帰った為朝はまずは勝ちを祝うことにした。そうして暫くは島の者達と酒を囲んでいた。

「これでまずは安心せよ」

彼は上座に座らせさせられていた。その場でまだ不安の残る島の者達に対して告げる。

「わしがおる限りな」

「ですが相手が相手ですし」

「それで」

まだ彼等は不安に満ちていた。それだけウナムシを恐れていると
いうことであつた。

しかし為朝は動じない。それどころか彼等にこう言い放つ程であつた。

「何なら今から海に出て漁をせよ」

「滅相もない」

「それは」

その言葉に皆肝を冷やす。

「幾ら何でも」

「ではしませぬ」

「まあすぐにそれができるようになる」

為朝は剛毅な笑いを見せて彼等に告げた。

「すぐにな」

「もう死んだのでしょうか」

「そう決め付けるのはあまりにも」

「死んでればそれまでだ」

為朝はここで杯の中の酒を一旦飲み干す。側にいる者が注ごうとするがそれを制止して自分で注ぎ込む。そうしてその酒をまた飲むのであつた。白く濁つた美味しい酒である。濁つてはいるがそこには

映るものが映っていた。為朝はこの時不敵に笑う自分の顔を見ていたのだ。

「しかし生きておれば」

「生きておれば」

「それ以上は言うまい。さあ飲もうぞ」

「そちらはもうやっておりますので」

「御安心を」

彼等は笑って為朝に答えるのであった。

「それならよい。それではな」

「はい」

こうして彼等は飲み続ける。その途中で宴に加わらずに外で見張りをしている者が入って来た。そうして為朝の前まで来て報告をするのであった。

「為朝様に御会いたいという者がいるのですが」

「この島の者が」

「そのようです」

彼はそう為朝に答えるのだった。

「是非共。ウナムシを倒した話を聞かせて頂きたいと」

「ほう、それはいい」

為朝はそれを聞いてさらに機嫌をよくさせた。杯を持つその顔がにこやかなものになる。

「では聞かせてやろう。連れて参れ」

「はい、それでは」

見張りは頷いてその場を一旦離れた。為朝はその彼の後姿を見ながら呟くのであった。

「思ったより早かったな」

笑みが変わった。今度は不敵な笑みであった。その笑みで笑いながらまた酒を飲む。そうしてその者が来るのを待つのであった。

程なくしてその島の者が連れて来られた。見れば妙齡の美しい女であった。為朝の知らぬ顔であった。

「その方だな」

「左様です」

杯を手にしたままの為朝に対して答えてきた。彼の前に跪いてい
る。

「私共を脅かすウンムシを倒して頂き有り難うございます」

「その話を聞きたいのだな」

「そうです」

女は答えた。

「それで宜しいでしょうか」

「是非もない」

これが為朝の返事であった。

「話してやるう。しかしその前にじゃ」

「何か」

「杯の酒がなくなつてしもうたのじゃ」

彼は笑つて女に告げてきた。

「それでじゃ。一杯」

「畏まりました」

「おや」

ここで先程彼に酒を注ごうとした男が妙に感じた。

「確か」

「これ」

しかし為朝は何故か穏やかな笑みを浮かべてその彼に対して言う
のであった。

「野暮なことは言うものではないぞ」

「はあ」

彼はこれは為朝の女好きのせいかと思つたが彼は特にそんなこと
はなかつた。武を好むが女に対してはそれ程ではないのはもう島の
者達は皆知っていることであつた。それについていぶかしむ思つた
がここはこれ以上考えるのを止めた。そうして彼が女から酒を受け
るのを見るのであつた。

「さあ」

為朝はその大きな杯を女の前にぐい、と出した。

「注いでくれ」

「わかりました」

女はそれに従い瓢箪の酒を杯の中に入れる。為朝は何故か注ぐ女ではなく酒を見ている。そうして酒に何かを見た瞬間だった。彼は動いた。

不意に女を突き飛ばした。それで杯が飛ぶ。杯は酒を撒き散らしながら高々と舞う。為朝はそれを眺めることなくすぐに自分の横に置いてあつた太刀を手を取った。そうしてそこから稲妻の速さで刀を抜くとそれで突き飛ばされ今起き上がるうとする女の首を一閃したのであつた。

首を飛ばされた女の身体はそのまままた倒れ込む。だが首は別であつた。宙に浮かび上がりそこで憤怒の顔で為朝を見ていた。そうしてそこから襲い掛かるうとしていた。

第四章

しかしそれも一瞬だった。今度はその首に対して上から刀を一閃させたのであった。胴から断ち切られたうえに真つ二つにされた首は今度こそ動けなかった。そうしてそのまま床に落ちて左右にゴロゴロと転がるのであった。

丁度そこに杯が落ちてきた。刀を右手に持っていた為朝はそれを左手で受け取る。酒はもうかなり零れてしまっていたがまだ残っていた。彼はそれを飲んでから大きく息を吐いたのであった。

「これでよし」

「よしではありません」

「為朝様一体何を御無体を」

「馬鹿を言うでない」

杯の酒を飲み干した為朝は驚きを隠せない島の者達に対して言う。

「わしは武器を持たぬ者や普通の者は切りはせぬ」

「しかし今」

「こうして」

「切ったというのだな」

まだ驚いている周りの者に対してまた言う。

「わしがこの女を」

「現にそうではありませんか」

「どうしてそのようなことを」

「では見るがいい」

為朝は今さつき切った女の二つに分かれた首を指差して告げた。

「この首は。何だ」

「女のものではありませんか。何を仰るかと思えば」

「いや、待て」

ここで皆その首が変わるのを見た。

「この首は」

「まさか」

彼等は首が変わっていくのを見た。首はそれぞれ四つずつ角のある牛のそれになっていた。それは。

「これは」

「わかったようじゃな」

為朝はここでまた島の者達に対して言うのであった。

「これはウンムシのものじゃな」

「はい」

「紛れもなく」

見間違える筈もない。その異形の姿は。

「では化けてここまで来たのですか」

「何という」

「生きておれば来ると思っておった」

為朝は驚くこともなく言うのだった。言いながら自分の座に戻る。そうして話を続ける。

「言っておったな。ウンムシは非常にしつこいと」

「ええ」

「それこそ岸まで追って来ます」

「だからじゃ。それならば来るとわかっていた」

彼はまた言う。

「こうしてな。それはわかっておった」

「しかし」

「どうしてこの女に化けているとわかったのでしょうか」

島の者達が次に不思議に思うのはそこであった。

「それはどのようにして」

「酒じゃ」

彼はここで杯を皆に見せて告げた。

「杯ですか」

「左様。ここの酒に映っておったのじゃ」

こう彼等に対して教える。

「それでわかつたのじゃ。まじまじとな」

「酒に姿が映っていた」

「それは」

「鏡は人のまことの姿を映し出すという」

「これはこの時から言われていた。それは為朝も知っていることであつたのだ。」

「化け物であつても。例え化けておつてもだ」

「それですか」

「そうじゃ。酒もまた鏡になる」

「ものが映るからだ。彼はここでは酒を鏡に使つたのである。」

「そういうことじゃ」

「水と同じころですな、それは」

「左様。はつきりと映つておつたわ」

「為朝の顔が険しくなつた。」

「鬼の如き牛の顔がな。さて」

「ウナムシの亡骸を見た。そうしてまた言つのだつた。」

「退治したこの化け物を弔つてやろうぞ」

「弔うのですか、この化け物を」

「化け物とて粗末にはならぬ」

「為朝はここでは武士としての顔を見せた。単に武勇に優れた豪傑ではないのであつた。」

「死すれば弔つてやろう。よいな」

「為朝様がそう仰るのなら」

「それでは」

「島の者達も異存はなかつた。これでおおよそのことは決まつた。」

「これで島の漁を脅かす化け物もいなくなった。弔いと共にそれも祝おうぞ」

「左様ですな」

「それは」

「島の者達もそれには異論はなかつた。そうして為朝の言葉に従う。」

彼の言葉に従いウンムシは甲われ漁ができるようになった。人々はそれを祝って祭りをする。これがウンムシ祭りのはじまりである。この祭りは今でも沖縄の島に残っているという。だがそれをはじめたのが誰であるかは伝わっていない。しかし源為朝が琉球王家の祖になったという伝説は残っている。ウンムシを倒したのは天下無双の豪傑であった彼としても伝説ならば不思議はない。あくまで伝説の中の話に過ぎないとしても。

ウンムシ 完

2007・12・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6012d/>

ウンムシ

2010年10月8日15時04分発行